

スペイン語版「イソップ寓話集」と国字本『伊曾保物語』

Aesop's Fables in the Spanish Version and “Isomonogatari”

伊藤博明*

ITO, Hiroaki

ルネサンスには多くの人文主義者・文学者が、中世のさまざまな伝承文献を基に、独自の「イソップ寓話集」を編纂・翻訳した。イタリアでは、エルモラオ・バルバロ（Ermolao Barbaro）が1422年に33篇を、オニベネ・ダ・ロニーゴ（Ognibene da Lonigo）が1430年頃に124篇を、ロレンツォ・ヴァッラが1438年頃に33篇を、そしてリヌッチョ・ダ・カスティリオーネ（Nuccio da Castiglione）が1440年に、「イソップの生涯」とともに100篇を、それぞれ訳出している¹。それらの中でも、1476年あるいは1477年にドイツのウルムで、ヨハネス・ツァイナー（Johannes Zainer）が刊行した、ハインリヒ・シュタインヘーヴェル（Heinrich Steinhöwel, 1411-79）編纂のラテン語・ドイツ語の二カ国版『イソップ』（*Esopus*）²は、ヨーロッパ中から大きな反響を得ることになった³。

この浩瀚な寓話集成を底本として、1480年にリヨンで、ジュリアン・マショー（Julien Macho）がフランス語版を出版し⁴、また、このフランス語版から、1484年にウェストミンスターで、ウィリアム・キャクストン（William Caxton）が英語版を刊行した⁵。さらにシュタインヘーヴェル版に基本的に拠ったスペイン語版が、1482年にサラゴサで⁶、1488年にトゥールーズで⁷、

1489年にサラゴサで刊行されている⁸。さらに、1593年（文禄2年）に天草の学林（コレジオ）から、『平家物語』と『金句集』と合本されて刊行された口語訳ローマ字本の『イソポのハブラス』（ESOPO NO FABVLAS）⁹、続いて、1610年代、慶長末年から元和初年の間に現れた、現在9集の刊行が知られている古活字本による国字本もまた¹⁰、シュタインヘーヴェル版の影響下にあったのである。

邦語版「イソップ物語」とシュタインヘーヴェル版との関係を指摘したのは、小堀桂一郎氏の先駆的な研究であった¹¹。ただし、典拠の問題がすべて解決したわけではなく、シュタインヘーヴェル版には含まれていない箇所が、邦語版「イソップ物語」には存在していた。具体的には、イソップの生涯の記述において、『伊曾保物語』上（14）の「中間とさぶらひと馬をあらそふ事」、中（7）「伊曾保人に請ぜらるゝ事」、寓話部の中の、同下（17）「鼠の談合の事」、（28）「鳩と狐の事」、下（30）「人の心のさだまらぬ事」、下（34）「出家と盗人の事」である。その後、遠藤潤一氏の精力的な諸研究¹²と、最近の兵藤俊樹氏の論考¹³によって、邦語版「イソップ物語」の訳者が参照したのは、シュタインヘーヴェル版の原本であるよりもスペイン語版であることが判明した。小論の目的は、15世紀と16世紀中頃までのスペイン語版について紹

* いたう・ひろあき
埼玉大学教養学部非常勤講師

介するとともに、現在までの議論を整理することにある。

最初に、シュタインヘーヴェル版の内容について簡単に見ておきたい。冒頭にはドイツ語による序文が置かれており、続いて、マクシムス・プラヌデス作と伝えられてきた「イソップの生涯」の、レミキウス（リヌッチョ・ダ・カスティリオーネ）によるラテン語訳が始まる。そののちに寓話集が置かれており、大きく6つの部分に分かれている。第1部にはロムルス集の第1～4巻で、それぞれ20話ずつ含まれている。第2部は「選外集」(Extravagantes)と名づけられており、17話が含まれている。それらのほぼ半分は「ミュンヘン・ロマヌス」と呼ばれるテキストに含まれているものであるが、それら以外については出典が知られていない¹⁴。第3部はレミキウスの編んだ「イソップ物語」から17話が、第4部はアウィアヌスの寓話集から27話が採られている。

シュタインヘーヴェル版は古典古代に由来する寓話だけではなく、第5部では、12世紀のスペイン人、ペトルス・アルフォンシの『賢者の教え』(Disciplina clericalis)¹⁵から15話を採っている。また、第6部では、同時代のイタリアの人文主義者、ポッジョ・ブラッチョリーニの『笑話集』(Facetiae)から8話を採っている。したがって、シュタインヘーヴェル版は、総計で164話にのぼる寓話を収めている。

15世紀のスペイン語版についてであるが、1482年のサラゴサ版(*Isopeta istoriado*, Zaragoza[: Pablo Hurus y Juan Planck])がポンプロナのセミナリオの図書館から発見されたのは比較的最近のことである。しかし、それは不完全な版なので¹⁶、1488年のトゥールーズ版(*Esopete istoriado*, Toulouse: Juan Parix y Esteban

Clebat)から考察を始めることにしたい¹⁷。このスペイン語版は、シュタインヘーヴェル版の構成と内容にほぼ忠実であり、「序文」も訳出している。また、翻訳にあたって同版のドイツ語訳を参照していることがうかがわれる¹⁸。ただし、両版においては、寓話の異動があり、またシュタインヘーヴェル版には見いだされない寓話も付加されている。それは最後のポッジョ・ブラッチョリーニに帰された寓話群において見られるので、シュタインヘーヴェル版の当該の箇所から検討することにした。のちの比較のために、アルフォンシの最後の寓話から始めることとして、シュタインヘーヴェル版の末尾の8つの寓話のタイトルは以下のとおりである。

xv. De sartore regis et eius sutoribus.

(15 王の仕立屋と彼の弟子たち。)

xvi. De muliere et marito in columbario clause, Pogii.

(16 鳩小屋に閉じ込められた妻と夫。ポッジョ)

xvii. De muliere puerum pariente gratia divina, marito absente, Pogii.

(17 夫の留守中に、神の恵みによって子を産む妻。ポッジョ)

xviii. De ypocrita et muliere vidua, Pogii.

(18 偽善者と寡婦。ポッジョ)

xix. De iuvenula impotentiam mariti accusante, Poggi.

(19 夫の不能を責める若妻。ポッジョ)

xx. Aucupii et venationis studium summa est amentia.

(20 鳥狩りと狩猟への熱意は最大の狂気である。)

xxi. De monstris aliquibus.

(21 ある怪物ども)

xxii. De sacerdote, eius cane et episcopo.

(22 司祭と彼の犬と司教。)

Fabula xxiii de vulpe et gallo et canibus, et pertinent ad finem quarti libri Esopi.

(寓話 23 狐と雄鶏と犬たち。イソップの第4巻の末部に属している。)

16 番以降の寓話はすべて、ポッジョの『笑話集』から採られたものか、幾つかの物語をまとめたものである。最後の 23 番は、シュタインヘーヴェル自身が付記しているように、本来、ロムルス集に含まれているものである¹⁹。なお、これらの寓話の中で、『伊曾保物語』の典拠となっているのは、中(6)「さぶらひ鶉鷹にすく事」に対応する「20 鳥狩りと狩猟への熱意は最大の狂気である」と、下(29)「出家とゑのこの事」に対応する「22 司祭と彼の犬と司教」である。

スペイン語版「イソップ寓話集」1488 年版の構成は、まず「イソップの生涯」ののち、ロムルス集から採られた第1～4部の 80 話が収められ、続いて、「選外の寓話」(Las fabulas extravagantes)として 17 話、「レミギウスの寓話」(Las fabulas de Remigio)として 17 話、そして、「アウィアヌスの寓話」(Las fabulas de Aviano)が 27 話含まれている。最後の「寓話選集」(Las fabulas coletas)は 26 話を含み、その内訳は、前半のアルフォンシの寓話が 14 話で、後半のポッジョの寓話は 12 話であり、スペイン語版全体では 167 話に達する。

シュタインヘーヴェル版と比較すると、外形的には、アルフォンシの寓話が 1 つ減り、ポッジョの寓話が 4 つ増えているわけだが、寓話が置かれているグループ間での異動などがあり、単純な寓話の増減がなされたわけではない。最初に、1488 年版における末尾の、ポッジョの名前を冠した寓話 12 篇のタイトルを掲げると、

以下のようになる。

La .xv. fabula Poggio dela muger et del marido ençerrado enel palomar.

(15 ポッジョの寓話。鳩小屋に閉じ込められた妻と夫。)

La .xvj. dela muger que pario vn niño pro la graçia de Dios seyendo el marido absente.

(16 夫の留守中に、神の恵みによって子を産む妻。)

La .xvij. del diabolito & dela vieja mala.

(17 悪魔と悪い老婆。)

La .xviii. del xastre maestro del rrey et de sus criados.

(18 王の仕立屋と彼の弟子たち。)

La .xix. del loco & del cavallero caçador.

(19 狂人と紳士の猟師。)

La .xx. del saçerdote & de su perro & obispo.

(20 司祭と彼の犬と司教。)

La .xxj. del ximjo & delas nuezes.

(21 猿とナッツ)

La .xxij. del padre & fijo que yuan a vender el asno.

(22 驢馬を売りに行く父と子)

La .xxiij. dela dueña viuda & del ypocrita.

(23 寡婦と偽善者。)

La .xxiiij. de vna muger que acusava su marido.

(24 夫を責めた妻。)

La .xxv. de algunos monstruos que fueron en aquel tiempo.

(25 あの時代に現われた、ある怪物ども。)

La .xxvj. dela diosa Venus & de su gallina.

(26 女神ウェヌスと彼女の雌鶏)

「イソップ物語」の内部での異動から述べるならば、シュタインヘーヴェル版において、「イソップの第4巻の末部に属している」と付記さ

れていた「23 狐と雄鶏と犬たち」は、スペイン語版では、第3巻に第8番「狐と雄鶏と犬たち」(La .viii. dela rraposa & del gallo & delos porros) として置かれ、元来その場所にあった「ユノとウェヌスと他の女たち」(Fabula viii de Junone et Fenere et aliis feminis) は、スペイン語版の最後の寓話に、「26 女神ウェヌスと彼女の雌鶏」として移されている。また、シュタインヘーヴェル版のアルフォンシの寓話「15 王の仕立屋と彼の弟子たち」は、ここでは、「18 王の仕立屋と彼の弟子たち」として、ポッジョの寓話集の中に配されている。

こうして、1488年版は結局、シュタインヘーヴェル版の寓話をすべて含み、そこに3つの寓話を、すなわち、「17 悪魔と悪い老婆」、「21 猿とナツ」、「22 驢馬を売りに行く父と子」を、いずれもポッジョの『笑話集』から加えているのである。そして、注目すべきは、かねてより、ポッジョが典拠ではないかと指摘されていた、『伊曾保物語』下30「人の心のさだまらぬ事」に対応する話の「22 驢馬を売りに行く父と子」が、このスペイン語版に見いだされることである²⁰。

このトゥールーズ版の1年後、1489年にサラゴサで新しいスペイン語版 (*Esta es la vida del Isopet con sus fábulas historiadadas*, Zaragoza: Juan Hurus) が刊行された。その内容は、1488年版の「22 驢馬を売りに行く父と子」までが含まれ、残りの寓話は省かれている。

1496年にブルゴスで刊行されたスペイン語版 (*Libro del Isopo, famoso fablador, historiado en romance*, Burgos: Fedrique Biel de Basilea) は、特異な点を有している。この版では、1488年版の「23 寡婦と偽善者」、「24 夫を責めた妻」、「25 あの時代に現われた、ある怪物ども」の三話が削除され、その代わりに、新しく次の三

つの寓話を載せている。

No deue hallar fe quien non la sabe guardar.

(信頼を守ることのできない者に信を置いてはならない。)

La mentira de muchos: mucha vezes tiene lugar de verdad.

(多数の嘘は、何度も繰り返すと真実となる。)

Ala mala mugger no hay nada impossible.

(悪女にとって不可能なことはない。)

これらの寓話は、「イソップ寓話」として伝承されてきたものではなく、また、アルフォンシやポッジョ・ブラッチョリーニに見いだされるものではない。それは、『カリーラとディムナ』と呼ばれる、東方起源の寓話集の、スペイン語版『世界の虚偽と危険に対する範例』(*Exemplario contra los engaños y peligros del mundo*) の中に含まれている話なのである²¹。その初版は1493年にサラゴサで刊行されており、再版も同じくサラゴサで1494年に刊行されているので、そのどちらからか採られた公算が高い²²。

16世紀に入って刊行されたスペイン語版は、1488年のトゥールーズ版に拠っていることが多い。たとえば、1520年のバレンシア版 (*La Vida de Isopo clarissimo y sabio fabulador, nuevamente corregida, historia y anotada*, Valencia: Juan Joffre) や1520年のセビリヤ版 (*Libro del sabio y clarissimo fabulador Isopo historiado y anotado*, Sevilla: Jacobo Cromberger) はまったく同じ構成と内容である。

一方、16世紀の中頃にアントウエルペンで、特色のあるスペイン語版が刊行されている (*La Vida y fáblas del clarissimo y sabio fabulador Isopo. Nuevamente emendadas. Exemplario, en el cual se*

*contienen muy buenas doctorinas, debaxo de
graciosas fábulas*, Anvers: Juan Steelsio y de Laet)。発行年は記されていないが、スペイン国立図書館のカタログには1546-47年(entre 1546 y 1547)と、ブリティッシュ・ライブラリーカタログには1550年頃(c. 1550?)と記載されている。コンタレロ・イ・モリは1541年と推定している²³。この「イソップ寓話集」は、タイトル自体が示唆しているように、実際には、そのスペイン語版と、上述した『カリーラとディムナ』のスペイン語版の合本である。

より仔細に見るならば、この版は1488年版のポッジョの寓話「19 狂人と紳士の獵師」までは同一である。しかし、「20 司祭と彼の犬と司教」を欠いており、したがって、次の「猿とナツツ」が20番となる(‘xx Del ximio, y delas nuezes’)。その後は「21 驢馬を売りに行く父と子」、「22 寡婦と偽善者」と続くが、次の寓話はこれまでのスペイン語版には収められていない、「23 獅子と狐」(‘xxiij Del leon, y del raposo’)である。これは、『カリーラとディムナ』のスペイン語版に含まれている話である²⁴。このアントウェルペン版は、ここで、いわば「イソップ寓話集」の部分を終了し、『カリーラとディムナ』のスペイン語版が次のタイトルのもとに続いている。「『世界の虚偽と危険に対する範例』——その中には、機知に富む寓話の下に、きわめて優れた教説と重要な警句が含まれている」(Libro llamado Exemplario, en el qual se contienen muy buenas doctrinas y graues sentencias, debaxo de graciosas fabulas, contra los enganos y peligros deste mundo)²⁵。

この部分は、合計で17の寓話から成っており、その最後は、「鳩と狼、すなわち、他の者たちには助言を与えようとして、自分自身には与えることができない者について語られる」

(Dela Paloma y dela raposa, y tracta de aquel qui non sabiendo aconsejar a sí mesmo, quiere dar cosejo a los otoros) というタイトルの寓話である。そして、これが『伊曾保物語』中の寓話で、シュタインハーヴェル版に含まれていない、下(28)「鳩と狐の事」の典拠と考えられうるのである。『伊曾保物語』の当該の寓話は以下のとおりである。

廿八 鳩と狐の事

ある時、うへ木に鳩巢をくふことありけり。しかるを、狐その下にあつて、鳩に申けるは、「御邊は何とてあぶなき所に子を育て給ふや。この所におかせ給へかし。雨風の障りもなし、穴にこそおくべきけれ」と云ければ、をろかなる者にて、誠かと心得て、その子を陸地に産みけり。しかるを、狐すみやかに餌食になしぬ。其時、かの鳩をどろひて、木の上に巢をかけけり。然るを、隣の鳩教へけるは、「さても御邊はつたなき人なり。今より以後、狐さように申さば、「汝、この所へあがれ。あがる事かなはずは、まつたくわが子を果たすべからず」とのたまへ」といへば、「げにも」とていひければ、狐申しけるは、「今よりして、御邊の上にはさはがする事あるまじ。但、頼み申べき事あり。その異見をば、いづれの人より受けさせて給ふぞ」と申ければ、鳩つたなふして、しかじかの鳥と答ふ。

ある時、かの鳩に教へける鳥、下におりて餌食を食みける所に、狐近づきて云、「そもそも御邊、世にならびめでたき鳥なり。尋申たき事有。其故は、埒に宿り給ふ前後左右より烈しき風吹時は、いづくにおもてを隠させ給ふや」と申ければ、鳥答へて云、「左より風吹く時は、右のつばさをかへりをさし、右より風吹く時は、左のつばさにかへりをさし候。前より風吹く時

は、うしろにかへりをさし候。うしろより風吹く時は、前にかへりをさし候」と申。狐申けるは、「あつばれその事自由にし給ふにおゐては、誠に鳥の中の王たるべし。たゞし、虚言や」と申ければ、かの鳥、「さらばしわざを見せん」とて、左右に頸をめぐらし、うしろをきつと見る時に、狐走りかゝつて喰らい殺しぬ。

そのごとく、日々に人に教化をなす程ならば、まづをのれが身をおさめよ。我身の事をさしおきて、人の教化をせん事は、ゆめゆめあるべからず²⁶。

出版年不明のアントウェルペン版の最後の寓話は以下のとおりである

Capitulo diez y siete de la paloma y dela raposa, y trata del hombre que da consejo a otro y para si no lo sabe tomar.

(欄外) No deue presumir de dar con sejo a otro quien para si no lo tiene.

(欄外) No es bueno seso no saber guardar secreto.

El rey disles queriendo ya dar fin a su pregunta dixo a su filosofo Sendebat. Necia cosa son las mugeres que siempre dessean mudar cosas nueuas, aunque sean dannosas. Solamente desseo agora saber alugun buen exemplo del hombre que conseja a los otros, y para si mismo ningun consejo sabe tomar. A esse tal [() respondió el filosofo) señor comparo yo al paxaro que aconsejo a paloma como librase a sus hijos de la raposa.

Tenia vna paloma su nido en vn arbol muy alto, enel qual con mucho trabajo lleuaua el comer a sus hijos, y al tiempo que sacaua los hijos llegaua vna raposa al pie aquel arbol, y amenzaua la tan terriblemente y cruel, que de miedo la paloma por saluar la vida, daua los hijos ala raposa para que los

comiesse. Yo como lo viesse vn paxaro que estaua en otro arbol delante vuo compassion dela forma que la paloma echaua a sus hijos, y dixole.

Manzilla es y dolor de ver tu crueldad y trayayo, y hazes de miedo lo que no sustre razon ni natura.

Por ende te aconsejo que quando la raposa viniere, y te amenazare como suele hazer le digas, amigo si

aca pudieres subir donde yo estoy, mi temor sera justro y la causa de mi crueldad assaz razonable, y

podran tanto tus amenazas que te dare en esse punto mis hijos, y si aquestro no puedes hazer, por cierto

en vano trabajas de amenazar a quien esta seguro de ti. Y dado aqueste consejo, se boluio a su arbol el

paxaro. Viniendo e tiempo que la paloma sacaua los hijos, llego la raposa al pie del arbol, y

commenço de amenazar y brauear como solia.

Respondio la paloma. Amiga mia el amenazar es por demas a quien bien en lugar seguro, si puedes

subir aca donde yo estoy ofrco desmampararte en esse punto mis hijos, donde no, toma paciencia, que

no los delibero perder tan cruelmente sin ver la causa porque. Quando vio la raposa que la paloma

tenia nueuo consejo dixole. Si mi dizes quien te dio este consejo, ofresco te de nunca te enojar, ni

pedirte mas tus hijos. Respondio la paloma. Esse paxaro que esta alii delante en esse arbol, enla orilla

del rio. Y dexando la paloma fue la raposa al paxaro, y hablando le con palabras muy dulces y

amigables, le dixo. Amigo , dime si gozes, quando te da el viento del lado derecho, donde pones por

reposar la cabeça? Respondiole el paxaro. Debaxo de la al yzquierda, y quando me da enel lado

yzquierdo pongo la sola derecha. Y quando te da por todo el cuerpo, donde la pones? Dixo el

paxaro. Detras enla cola. Respondio entonces la raposa. Esso tengo yo por gran marauilla, y no lo

podria creer si non lo viesse, y si lo hazes te digo que no ay aue enel mundo tan discreta, ni que tanto sepa guardar a si mesma. Entonces el paxaro de vana glorioso y de nescio, por demostrar su saber, puso la cabeza entre las alas escondida cabe la cola, y viendolo lo assi la raposa cubierto asio del en vn falto, y dixole. Amigo bueno fuera que supieras aconsejar a ti mismo, como presumiste de aconsejar a los otros.

Lo cosa presumptuosa y de gran desuario, lo qual suele acaescer a los hombres llenos de viento, que olvidando a si mesmos, y no mirando sus yerros, todo su pensamiento y estudio ponen en aconsejar a los otros y poniendo los ojos sin consideracion en el cielo, tropieçan y caen vergonçosamente y con danno en el suelo²⁷.

(第 17 章 鳩と狐、そして、他の人々に助言を与えるが、自分自身のためには助言をすることができない者について語られる。

(欄外) 自分への助言ができない者は、他人に助言をしようと思うべきではない。

(欄外) 秘密を守ることのできないのは、善い分別ではない。

さて、ディスレス王が自らの問いに決着をつけようと望んで、彼の哲学者センデバルに言った。「たとえ害を及ぼすものであっても、常に新しい事柄を欲している女たちは愚かなものだ。我は今、ただひたすら、他の者たちに助言しながら、自分自身にはいかなる助言も与えることができない人間の、何かよい例を知りたい。「このような者については——と哲学者は返答した——、王よ、私は、鳩に対して、その雛たちを狐から遠ざけることを助言した鳥と比較しましょう」。

ある鳩がとても高い木に巣をつくり、たいへん苦勞して、雛たちに餌を運んでいました。そ

して、雛たちを手放すときに、その木の下にある狐がやって来て、とても恐ろしく、残酷に脅すので、鳩は恐れをなして、自分の生命を救うために、雛たちを狐に与えてしまい、狐はそれらを食べるのです。この木の前の他の木にいたある鳥はこれを見て、鳩が雛たちを投げ落とす光景に同情して、鳩に言いました。「あなたの残酷さと労苦を見るのは、辛く悲しいことです。そしてあなたは、恐れあまり、理性も本性も耐えられないことをしているのです。それゆえ、私はあなたに助言しましょう。狐がやって来てあなたを、いつもするように脅かすときには、こう言いなさい。『狐さん、私がいるここへあなたが登ってくるができるならば、私の恐れも正しいでしょうし、私の残酷さの原因も十分に理解できるものであり、あなたの脅しが強ければ、そのときには、私は私の雛たちをあなたに差し上げるでしょう。しかし、もしあなたにそのことができないのならば、たしかに、あなたから安全にいる者を脅そうとしても無駄でしょう』。この助言を与えて、その鳥は自分の木へと戻っていきました。鳩が雛たちを手放す時が到来すると、狐が木の下にやって来て、いつものように脅かして怒鳴り始めました。鳩はこう返答しました。「狐さん、脅しは、安全な場所で生きている者には無駄なことです。もしあなたが、私がいるここへ登ることができるならば、そのときには、私は私の雛たちを見棄てて差し出すでしょう。もしできないならば、我慢してください。というのも、私は、正しい理由もなしに、雛たちを残酷にも失うことについて考えもしなかったからです」。狐は、鳩が新しい助言を得たことを見て取って、鳩に言いました。「もし君が私に、君にこの助言を与えた者を教えてくれるならば、私は君に怒鳴ることは決してないだろうし、また君が君の雛たち

を失うこともないだろう」。鳩は答えました。「それは、川岸にある木の前にいる鳥です」。そして、狐は鳩を後に残すと、その鳥のところに行き、とても優しく、親しげな言葉で話しかけて、こう言いました。「やあ鳥さん、もし君によかったらだが、君の右側から風が吹いたときに、君の頭をどこに休めるのかを教えてくださいませんか」。鳥は答えました。「左の翼の下です。また、私の左側から風が吹いたときは、右側の翼の下に置きます」。「それでは、君の身体全体に風が吹いたときには、どこに頭を置くのかい」。鳥は言いました。「後ろの、尾の中に、です」。そこで狐は返答しました。「私が思うに、それはたいそう驚くべきことだ。だが、君が実際に見せてくれないと、私は信じることができない。もし君が見せてくれるならば、世界の中で、君ほど明敏であり、君ほど自分自身を護ることを知っている鳥はいない、と君に言うことになるだろう」。そこで、空しい自惚れ屋で、愚かな鳩は、自らの知恵を示そうとして、頭を両翼の間に深く置き、尾の方へ入れました。すると、狐は、鳩の頭が覆われたのを見て、たちまち飛びかかり、鳩に言ったのです。「鳩さん、君がきどって他の者たちに助言を与えたように、君自身にも忠告できるならばよかったのに」。

ああ、自惚れた、ひどく馬鹿げたことが、虚栄に満ちた人々に生じるのが常なのである。彼らは、自分自身のことを忘れ、自分の誤りに気づかず、自分の思念と努力のすべてを他人に助言することに傾ける。考えもなしに両眼を天へと向け、つまづいて、地面に倒れ、恥ずべきことに、痛手を被る。)

この箇所について、スペイン語版『カリーラとディムナ』1493年版の該当するテキストとの

異動はほとんど見いだされない²⁸。この寓話を、『伊曾保物語』の下(28)「鳩と狐の事」と比較すると、タイトルも含めて、後者の典拠であることは明白である。しかし、このスペイン語版イソップ寓話集のアントウェルペン版が、『伊曾保物語』全体の典拠と見なすには大きな障害が存在している。それは、上述したように、『伊曾保物語』下(29)「出家と葱のこの事」に対応する、「20 司祭と彼の犬と司教」をこの版は欠いているからである。

この点で注目すべきは、1546年にアントウェルペンで刊行されたスペイン語版である(*Las fábulas del clarissimo y sabio fabulador Isopo. Nuevamente emendadas. A las cuales agora se añadieron algunas nuevas muy graciosas, hasta aquí nunca vista y impresas. Con su Vida, maneras, costumbres y muerte; y mas una Tabla de lo que en este libro va declarado*, Anvers: Juan Steelsio)。この版は、1488年版の寓話をすべて、同版と同じ順序で配したうえで、「27 ライオンと狼」、および「28 鳩と狐」を加えている。すなわち、スペイン語版『カリーラとディムナ』から2つの寓話を採録しているのである。

「28 鳩と狐」について見るならば、タイトルは「28 鳩と狐」(*La .XXVIII. De la paloma, y raposa*)であり、その後、先のアントウェルペン版では欄外に記されていた警句が、文頭の字を下げて、「自分への助言ができない者は、他人に助言をしようと思うべきではない」(**No deue presumir de dar consejo a otro quien para si no lo tiene*)として記されている。本文は、同版の冒頭の10行を省略して、「ある鳩がとても高い木に巣をつくり、たいへん苦勞して、雛たちに餌を運んでいました」から始まっている。そして、この部分から最後まで、同版と同一のテキストが載せられている。

1546年刊行のアントウェルペン版は1551年に同地で再版されている。さまざまな可能性は考えうるであろうが、シュタインヘーヴェル版に含まれていない、二つの寓話、すなわち「驢馬を売りに行く父と子」と「鳩と狐」を含む、これらのスペイン語版のどちらかが『伊曾保物語』の、少なくとも、原典の一つであると推測することができるだろう。

『伊曾保物語』の寓話部において、これらのスペイン語版にも含まれていない、典拠が不明な寓話は、下(17)「鼠の談合の事」と、最後の寓話の下(34)「出家と盗人の事」である。前者については、中世とルネサンスにおいて、さまざまな説話集・寓話集に採録されている有名な寓話であり、『伊曾保物語』の「鼠の談合の事」は、直接的には、アステーミオの『百話集』の第二集に採録されたもの(16世紀のラテン語版イソップ寓話集に所収)を典拠としていると、現在のところ考えられている²⁹。しかし、典拠が不明なもう一つの寓話「出家と盗人の事」に対応する近代のテキストが発見されていないために、確定的なことはまだ言えない状況にある。

ところで、「出家と盗人の事」の典拠として、13世紀にイングランドで活躍した説教師オドー・オブ・シェリトン(Odo of Cheriton, 1180/1190-1246/47)³⁰の『寓話集』(*Fabulae*)に見られる一話と推測する指摘が為されている³¹。最後に、この寓話について紹介しておきたい。まず、『伊曾保物語』のテキストは以下のとおりである。

卅四 出家と盗人の事

ある法師、道を行ける所に、盗人一人行きむかつて、かの僧を頼みけるは、「見奉れば、やんごとなき御出家也。われならびになき悪人な

れば、願はくは、御祈りをもつてわが悪心を翻し、善人となり候やうに祈誓し給へかし」と申ければ、「それこそ我身にいとやすき事なり」と領掌せられぬ。かの盗人も返返頼みて、そこを去りぬ。

其後はるかに程経て、かの僧と盗人行きあひけり。盗人、僧の袖を控へて、怒って申しけるは、「われ御邊を頼むといへども、その甲斐なし。祈誓し給はずや」と申しければ、僧答云、「我其日より片時のいとまもなく、御邊の事をこそ祈り候へ」とのたまへば、盗人申しけるは、「おことは出家の身として、虚言をのたまふ物かな。その日より悪念のみこそおこり候へ」と申しければ、僧の謀に「俄に喉かはきてせんかたなし」とのたまへば、盗人申しけるは、「これに井どの侍るぞや。我上より縄を付て、その底へ入奉るべし。飽くまで水飲み給ひて、あがりたくおぼしめし候はば、引き上げ奉らん」と契約して、件の井どへおし入けり。かの僧、水を飲んで、「上給へ」とのたまふ時、盗人力を出してえいやと引けども、いさゝかもあがらず。いかなればとて、さしうつぶして見れば、何しかはあがるべき、かの僧、そばなる石にしがみつきておる程に、盗人怒って申しけるは、「さて御邊はをろかなる人かな。その儀にては、いかが祈禱も驗有べきや。其石放し給え。やすく引き上げ奉らん」と云。僧、盗人に申しけるは、「さればこそ、われ御邊の祈念を致すも、此ごとく候ぞよ。いかに祈りをなすといへ共、まづ御身の悪念の石を離れ給はず候程に、鐵の縄にて引上る程の祈りをすればとて、兼の縄を切るゝ共、御邊のごとく強き悪念は、善人に成がたふ候」と申されければ、盗人うちうなづゐて、かの僧を引上奉り、足本にひれ臥して、「げにもかも」とて、それより元結切り、則僧の弟子になりて、やんごとなき善人とぞなりにけり。此經を見ん

人は、たしかに是を思へ。ゆるかせにする事な
かれ³²。

オドー・オブ・シェルトンの対応する寓話は
以下のとおりである。

XXXVIa. DE QUODAM JUSTO ROGANTE
DOMINUM PRO QUODAM PECCATORE.

Similiter quidam Iustus orauit pro quodam
Peccatore, quia rogauerat eum. Reuersus est
Peccator, dicens: Domine, non sentio quod orationes
uestre mihi ualeant, quia ita pecco, ita lapsum pacior
ut prius. Et ait Iustus: Veni mecum. Iuerunt
simul, et saccus in quodam loco cecidit de equo.
Et dixit Iustus ad Peccatorem: Subleuemus saccum.
Fiat, dixit Peccator. Ambo apposuerunt manus.
Peccator nisus est erigere saccum; Istus semper
traxit aliud capud ad terram. Et ait Peccatori:
Quare non erigis? Et ait Peccator: Nequeo, quia tu
semper tarahis ad terram. Et ait Iustus: Ita facis tu
mihi: ego per orationes uellem te erigere; sed tu
semper trahis in terram, quia semper peccas. Sed,
si uelles mecum niti, te ipsum ambo erigere
possemus³³.

(36a ある罪人のために「主」に願うある義人
について。同様に、ある義人が、ある罪人が願
ったがゆえに、彼のために祈った。罪人は戻っ
てきて、言った。「先生、あなたの祈りが私に
効果があるとは私には思えません。というのは、
私は罪を犯しており、以前と同様に罪に陥って
いるからです」。すると義人は言った。「私とと
もに来なさい」。彼らは一緒に出かけた。する
と、ある場所で、袋が馬から落ちた。すると義
人は罪人に言った。「その袋を引き上げよう」。
「分かりました」と罪人は言った。二人はそれ
に手を置いた。罪人は袋を持ち上げようと努め

た。義人はずっと、袋の一方の端を地面へと引
つ張った。そして彼は罪人に言った。「なぜお
まえは持ち上げないのか」。そこで罪人は言っ
た。「私にはできません。なぜなら、あなたが
ずっと地面へと引つ張っているからです」。す
ると義人は言った。「そのように、おまえは私
に為しているのだ。私は祈りによってお前を持
ち上げようとしているのに、あまえはずっと罪
を犯すことによって、ずっと地面に引つ張って
いる。しかし、もしお前が私とともに努めるの
であれば、われわれは二人で、おまえ自身を持
ち上げることができる。）」

オドー・オブ・シェルトンの寓話集は、13世
紀にスペイン語版が成立している。この作品は
『猫の書』(*El libro de los gatos*)と題されてい
るが、著者は定かではない³⁴。対応する寓話は、
第30番「鷺鳥と鴉の譬え」(ENXIENPLO DEL
ANSAR CON EL CUERVO)の二つ目の話とし
て、以下のように語られている。

Otrosi un pecador fuese una vegada a confesar a
un ombre santo. E rrogloe que pidiese de merçet a
Nuestro Señor que El por la su santa piedad llo
quissiese partir de aquellos pecados en que andava.
El ombre bueno rrogo a Dios por el, e a cabo de un
año tornose el ombre pecador al ombre santo e
dixole:

—Señor, non siento que las tus oraçiones me
fazen pro ninguna, que tanto pecador me siento
commo suelo, e el mi coraçon tan enbuelto sta en
pecado commo suele.

E dixole el ombre santo: —Amigo, ven conmigo.

Ellos fueronse amos y dos e falloraon en el
camino un saco lleno de trigo que cayera de una
bestia.

E dixo el justo al pecador: —Toma de ay.
E echan amos mano del saco, e el pecador
esforçavasse de levantar el saco. E el justo tiravalo
contra tierra quanto podia.

El pecador violo e dixolle: —Señor ¿por que
abaxas este saco contra tierra? E ansi faziendo,
nunca llevataremos el costal.

E dixo el justo: —Ansi me conteçe contigo,
que pido merçet al mi Senor Jhesu Christo por ti e
quierote levantar por mis oraciones, mas tu siempre
tiras contra tierra que siempre pecas mas. E si tu
quisieses esforçarte conmigo e partirte de algun
pecado, entre nos amos poderte yamos facer yr a
parayso³⁵.

(さらに、ある罪人が、ある日、ある聖なる人に告白するために行った。罪人は彼に対して、我らが「主」の聖なる憐れみによって、これまで犯してきた罪から逃れることができるように、我らが「主」の慈悲を祈ってくれることを願った。その善良な人は彼のために神に祈った。そして、一年後、その罪人は聖なる人のもとに戻ってきて、こう言った。

「先生、あなたの祈りが効果があったとは、私にはまったく思えません。なぜなら、私は以前と同様の罪を犯していますし、私の心は、以前と同様に罪によって包まれているからです」。

すると聖なる人は彼に言った。「友よ、私と一緒に来なさい」。

彼らは二人で一緒に行った。そして、道端で、家畜から落ちた小麦で一杯の袋に出会った。

そして義人は罪人に言った。「それを取り上げなさい」。

二人はその袋に手をかけた。そして罪人は袋を持ち上げようと努めた。しかし義人は、できる限り、それを地面に引っ張っていた。

罪人は彼を見て、彼にこう言った。「先生、

なぜあなたはこの袋を地面から引き上げないのですか。このようにすれば、われわれは袋をけっして持ち上げることができないでしょう」。

すると義人は言った。「そのようにお前は私に振る舞っているのだ。なぜなら、私はおまえのために、わが主であるイエス・キリストに慈悲を願い、私の祈りによっておまえを持ち上げようとしているのに、おまえはずっと罪を犯して、ずっと地面に引っ張っているからだ。しかし、もしお前が私とともに努めようとし、いかなる罪からも自ら離れようと望むならば、われわれは二人で、おまえを天国へと行かせることもできる」。

たしかに、モチーフの類似は見取ることが可能ではあるが、これらには、他の三つの寓話のような正確な対応は見いだすことができない。また、『伊曾保物語』の典拠の問題を考える上で重要なのは、オドー・オブ・シェリトンの『寓話集』も、そのスペイン語版の『猫の書』もルネサンス期には刊行されていない点である。前者が初めて活字となったのは 1868 年であり³⁶、後者は 1860 年である³⁷。結局、この寓話の典拠についてはさらなる探究の対象として残されているのが現状である。

註

1 Cf. Carlo Filosa, *La favola e la letteratura esopiana in Italia dal Medio Evo ai nostril tempi*, Milano, 1952; Paul Thoen, "Aesopus Dorpii. Essai sur l'Ésope latin des temps modernes," *Humanistica Lovaniensia*, 19 (1970), pp.241-316; Idem, "Les grands recueils ésopiques des XVe et XVIe siècles et leur importance pour les littératures des temps modernes," in *Acta Conventus Neo-Latini Lovaniensis: Proceedings of the First International Congress of Neo-Latin Studies*, Louvain 23-28 August 1971, eds. J. Ijsewijn and Kesseler, Louvain - München, 1971, pp.659-777; David March, "Aesop and the Humanist Apologue," *Renaissance Studies*, 17 (2003), pp.9-26.

Roberto Galli, *The First Humanistic Tranlations of Aesop*, Thesis, University of Illinois at Urbana-Champaign, 1978.
2 Cf. *Steinhöwels Aesop*, ed. Hermann Österley, Bibliothek des Literarischen Vereins in Stuttgart, 117, Tübingen:

- Litterarischen Verein, 1873.
- 3 Cf. Robert T. Lenaghan, "Steinhöwel's 'Esopus' and Early Humanism," *Monatshefte*, 60 (1968), pp.1-8; Barbara Konneker, "Die Rezeption der aesopischen Fabel in der deutschen Literatur des Mittelalters und der frühen Neuzeit," in *Die Rezeption der Antike*, ed. August Buck, Hamburg: Ernst Hauswedell, 1981, pp.209-224; Puck Carnes, "Heinrich Steinhöwel and the Sixteenth-Century Fable Tradition," *Humanistica Lovaniensia. Journal of Neo-Latin Studies*, 35 (1986), pp.1-29; Gerd Dicke, *Heinrich Steinhöwels "Esopus" und seine Fortsetzer: Untersuchungen zu einem Bucherfolg der Frühdruckzeit*, Tübingen: Niemeyer, 1994.
 - 4 Cf. *Julian Macho Esopo*, Eingeleitet und herausgegeben nach der Edition von 1486 von Beate Hecker, Hamburg: Romanisches Seminar der Universität Hamburg, 1982; *L'Esopo de Julien Macho*, Publié par Pierre Ruelle, Paris: A. et J. Picard, 1982.
 - 5 Cf. *The History and Fables of Aesop*, Translated and printed by William Caxton, London: Scolar Press, 1976; *Caxton's Aesop*, Edited with an Introduction and Notes by R.T. Lenaghan, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1967. ウィリアム・キャクストン『イソップ寓話集』、伊藤正義訳、岩波ブックサービスセンター、1995年。
 - 6 Cf. *El "Ysopete ystoriado" de 1482*. Edición crítica de Carmen Navarro y Elena Dal Maso, Arriçia (RM): Aracne editrice, 2016.
 - 7 Cf. *The Texts and Concordances of Esopete ystoriado, Toulouse 1488 (John Rylands Library) and Ysopete ystoridado, Zaragoza 1489 (Escorial 32-I-13)*, Microfiche, Edited by Victoria A. Burrus, Madison: The Hispanic Seminary of Medieval Studies, 1980; *Esopete ystoridado (Toulouse 1488)*, Edition, Study and Notes by Victoria A. Burrus and Harriet Goldberg, Madison: The Hispanic Seminary of Medieval Studies, 1990.
 - 8 *Fábulas ilustradas con las xilografías de la edición incunable de Zaragoza (1489)*, Con prólogo de E. Catarelo y Mori, Madrid: Real Academia Española, 1929; *The Texts and Concordances of Esopete ystoriado, Toulouse 1488 (John Rylands Library) and Ysopete ystoridado, Zaragoza 1489 (Escorial 32-I-13)*, Microfiche, Edited by Victoria A. Burrus, Madison: The Hispanic Seminary of Medieval Studies, 1980; *Aesop's Fables with a Life of Aesop*, Translated from the Spanish with an Introduction by John E. Keller and L. Clark Keating, Lexington, Kentucky: The University Press of Kentucky, 1993.
 - 9 現存する唯一の版は、ブリティッシュ・ミュージアムに所蔵されている。Cf. Kenneth B. Gardner, *Descriptive Catalogue of Japanese Books in the British Library Printed before 1700*, London: The British Library / Tenri Central Library, 1993, pp.411-412. 複製本としては、京都大学文学部国語学国文学研究室編『文禄二年耶蘇会版伊曾保物語』、京都大学国文学会、1963年、および『天草版イソポ物語』、大英図書館本影印、福島邦道解説、勉誠出版、1976年がある。標準的な校訂版は、新村出・柗源一校註『吉利支丹文学集』下、「日本古典全書」、朝日新聞社、1960年に収められた『イソポのハプラス』であり、同書は、『吉利支丹文学集』2、米井力也解題、「東洋文庫」570、平凡社、2008年において復刻されている。以下の版も有益である。大塚光信『キリシタン版エソポ物語 付古活字本伊曾保物語』、角川書店、1971年〔改訂版、『キリシタン版エソポのハプラス私注』、臨川書店、1983年〕。
 - 10 これらの刊本の間には大きな異同は見られない。標準的な校訂版は、『假名草子集』、「日本古典文学大系」90、岩波書店、1961年、に収められた、森田武校註『伊曾保物語』である。上記の大塚光信による校訂版も存在する。以下も参照のこと。遠藤潤一『伊曾保物語第二種本の翻刻と本文研究』、風間書房、1993年。
 - 11 小堀桂一郎『『伊曾保物語』原本考(上)(下)——シュタインヘーヴェル本『イソップ集』に就いて——』、『文学』、第26巻10号(1978年10月)、136-148頁；第46巻12号(1978年12月)、91-112頁。同『イソップ寓話——その伝承と変容』、中公新書、1978年(講談社学術文庫、2001年)。
 - 12 遠藤潤一『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究』正編、風間書房、1983年；続編、1984年；総説編、1987年。
 - 13 兵藤俊樹『伊曾保物語』下巻28「鳩と狐の事」とスペイン語イソップと『カリーラとディムナ』、『和歌山大学教育学部紀要(人文科学)』、第85集(2015)、99-110頁。
 - 14 Cf. Dick, *op.cit.*, p.44.
 - 15 Cf. 『賢者の教え——中世スペイン説教集』、伊藤正義訳、岩波ブックサービスセンター、1993年；『知恵の教え』、西村正身訳、溪水社、1994年。
 - 16 Cf. José Goñoz Gaztambide, "Incunables de Pamplona," en *La imprenta en Navarra*, Pamplona: Diputación Foral de Navarra – Institución Príncipe de Viana, pp.77-112; Carmen Navarro, "El incunable de 1482 y las ediciones del *Isope* en España," *Quederni di lingue e literature*, 15 (1990), pp.157-164.
 - 17 15世紀のスペイン語版については以下を参照。Guthrie Vine, "Around the Earliest Spanish Version of Aesop's Fables," *Bulletin of the John Rylands Library*, 24 (1941), pp.3-24; Dieter Beyerle, "Der spanische *Äsop* des 15. Jahrhunderts," *Romanistisches Jahrbuch*, 31 (1980), pp.312-338; Carmen Navarro, "Notas a la iconografía del *Isope* español," *Quederni di lingue e literature*, 18 (1993), pp.543-576; Victoria A. Burrus, "The *Esopete ystoriado* and the Art of Translation in Late Fifteenth-Century Spain," *Livius: Revista de studios de traducción*, 6 (1994), pp.149-162; María Jesús Lacerra, "La fortuna del *Isope* en España," en José Manuel Fradejas Rueda, Déborah Dietrich Smithbauer, Demetrio Martín Sanz y M. Jesús Diez Garretas, eds., *Actas del XIII Congreso Internacional. Asociación Hispánica de Literatura Medieval (Valladoild, 15 a 19 de septiembre de 2009)*, Valladolid: Ayuntamiento-Universidad de Valladolid, 2010, pp.107-134.
 - 18 Cf. Burrus, "The *Esopete ystoriado* and the Art of Translation in Late Fifteenth-Century Spain," cit.
 - 19 Cf. Dicke, *op.cit.*, p.46.
 - 20 Cf. 伊藤博明「ポッジョ・ブラッチョリーニと『伊曾保物語』——シュタインヘーヴェル編『イソップ寓話集』のスペイン語版について」、『埼玉大学紀要(教養学部)』、第45巻第2号(2009)、(1)~(15)頁。
 - 21 Cf. *Exemplario contra los engaños y peligros del mundo. Estudios y edición*, Dirigido por Marta Haro Cortés, València: Universitat de València, 2007, pp.25, 132, 186, 190.
 - 22 Cf. *Ibid.*, pp.49-50.
 - 23 *Fábulas ilustradas con las xilografías de la edición incunable de Zaragoza (1489)*, Con prólogo de E. Catarelo y Mori, cit., p.XXXIII. Cf. *Exemplario contra los engaños y peligros del mundo*, cit., p.52.

- 24 Ibid., pp.247-248.
- 25 *La Vida y fáblas del clarissimo y sabio fabulador Isopo*, fol.141r.
- 26 森田武校注、『假名草紙集』、463-464 頁。
- 27 *La Vida y fáblas del clarissimo y sabio fabulador Isopo*, foll. 269r-270r.
- 28 Cf. ed. Cortés, pp.275-277.
- 29 詳しくは以下の拙論を参照。伊藤博明「「猫の首に鈴をつける」(1) ——アステーミオ『百話集』をめぐる」、『埼玉大学紀要(教養学部)』、第 46 巻第 1 号(2010)、31-60 頁。
- 30 Cf. Albert C. Friend, “Master Odo of Cheriton,” *Speculum*, 23 (1948), pp.641-658.
- 31 Cf. <http://web.kyoto-inet.or.jp/people/tiakio/cicada/isopl.html>.
- 32 森田武校注、『假名草紙集』、472-473 頁。
- 33 Odonis de Ceritona, *Fabulae*, in Léopold Hervieux, *Les Fabulistes latin. Depuis le siècle d'Auguste jusqu'à la fin du moyen âge*, Tome IV: Eudes de Cheriton et ses dérivés, Paris, 1896, p.210.
- 34 Cf. G. T. Norhtup, “El libro de los gatos, A Text with Introduction and Notes,” *Modern Philology*, 5, no.4 (1908, April), pp.1-78; *El libro de los gatos*, Edición crítica por John Esten Keller, Madrid : Consejo superior de investigaciones científicas, 1958; *Libro de los gatos*, Édition avec introduction et notes par Bernard Barbord, Paris: Klincksieck, 1984; *Fábula y mundo. Odo de Chérítón y el libro de los gatos*, ed. Carmen Elena Armijo Canto, México : UNAM, 2014; Carmen Elena Armijo Canto, “*El Libro de los gatos y Fabulae de Odo de Chérítón*. Algunas omisiones y adaptaciones,” *Acta poét*, 29, n.2 (2008), pp.229-244.
- 35 Ed. Keller, pp.106-107. Cf. ed. Darbord, pp.115-116.
- 36 Hermann Oesterley, “Die Narrationes des Odo de Cirigtonia,” *Jahrbuch für romanische und englische Literatur*, 9 (1868), pp.121-154.
- 37 *Libro de los gatos*, ed. Pascual de Gayangos, in *Biblioteca de Autores Españoles*, Madrid, 1860, pp.542-560.